

11月17日、創立40周年記念コンサートがロンドンの国会議事堂近く、St. John's Smith Squareにて行われました。演奏者たちは、今まで積み重ねてきた練習の成果を遺憾なく披露することができました。



創立40周年記念コンサート

立教英国学院通信

音楽の力

高三 藤木 紫苑

楽屋に響く様々な楽器の音、ピアノ、フルート、トランペット、バイオリン、ギター。その空間が心地よくて、私は他のいろんなことを忘れそうになった。音楽が人に与える影響は大きい。一瞬で悲しい気持ちにさせたり、楽しい気持ちにさせたり、全てを忘れさせてくれたりする。

私は、クワイヤーの一員としてコンサートに参加した。半年ほど前から練習し続けた自信がメンバーにあったように感じた。一学期に歌った時とは全く違う感覚であった。技術的に細かく練習したことも大きい。さちんと歌詞の意味を考えて歌ったことも大きく影響したように感じた。音楽や芸術と言うものに正解や不正解はないが、人に伝わるものか、伝わらないものかは有るのではないかと思う。立教の生徒には、人に伝えられる演奏ができる人が何人もいるように私は感じる。そんな素晴らしい才能を持った生徒の居る立教だからこそ、記念コンサートをしてお客様に感謝を伝えることができるのだと改めて感じた。

一学期のスクールコンサート、オープンデ이의コンサート、ドレスリハサル、当日の午前のリハサル。何度も演奏を耳にして、同じ曲でも毎回少しずつ違っていることに気づいた。その時のその一瞬しか生み出せないからこそ、生のコンサートはおもしろい。そして本番により完成度の高い演奏ができるように合わせてらる立教の演奏者達に、プロ意識のようなものを感じた。舞台のうしろに大きく広がる窓ガラスとその後ろにある枯葉の落ちる木。暗くなるにつれ見えてくる木につけられたイルミネーション。高い天井に響く音色を感じ、ロンドンの美しい風景を楽しめる素晴らしい一時を過ごせる、そんなコンサートに参加できたことを心から嬉しく思った。

第二百六十二号 二〇二二年十二月十六日
発行者 立教英国学院

RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND
GULDFORD ROAD, RUDGWICK RH12 3BE
<http://www.rikkyo.co.uk>

縁の下の力持ち

高一—二 東山 瑞季

学校の中にあるニューホールではなく、立教から約一時間離れたロンドンのセント・ジョンズ・スミス・スクエアのホールで行なわれたコンサートの中で、私は一つ気づいたことがある。それは、コンサートマネージャーの大変さと、そのありがたみだ。

私はずっと、コンサートの中で一番大変なのは、演奏者だと思っていた。もちろんたくさん練習が必要だし、本番はものすごく緊張する。演奏者はコンサートの中心である。しかし、今回、毎回のコンサートが成り立っていく上で、コンサートマネージャーというのはすごく重要な役割を果たしているんだと思った。

一週間前、昼食が終わってから、ドレスリハサルがあった。私はクワイヤーの時だけいけばよいから、着替えて一時間ほどニューホールにいて、リハサルをして帰ってきた。でも、コンサートマネージャーは全てのリハサルを管理するから、五時半まで帰って来ず、ずっと仕事をしていた。本番の今日も、私達が控え室で待機していた時もずっといろいろなことに気を配り、全員に飲み物を配ったり、私達が次にすることを説明してくれた。十一時、カフェで昼食を食べ終え、控え室に戻ると、コンサートマネージャーの一人がいた。

「なんで昼食食べないの？」と聞くと、「もうすぐ私の練習だから準備していかないといけないんだ。」と言っていた。

こういうのを、『縁の下の力持ち』というのはないだろうか。次のコンサートでは、コンサートマネージャーに、「いつもありがとう」と言いたい。

目次

	ページ
創立 40 周年記念コンサート	1
オープンデイ	2～3
2 学期の行事	2
フラワーアレンジメント部	3
アウティング	4～5
男子バスケットボール部	4
川畠成道バイオリンコンサート	6
立教歳時記	6
英語科プロジェクト	7
毎日小学生新聞に掲載される！	7
第9回 チャブレンより	8



Choir (クワイヤー) の出演



泣き笑いを仲間と共に

OPEN DAY



一学期から準備をすすめ、一週間のブレイク期間、学校中が一丸となって朝から晩まで取り組んできたオープンデー。今年度のスローガンは「Make it happen!」。生徒たちの熱い思いが数々の奇跡を起こしました。



焼き鳥を担当する高3

オープンデー

小五 大石 桜子

私にとって、このオープンデーはとても短く感じました。

みんなでいろんなアイデアを出し合い、私たちがとても良い作品を作り上げることが出来ました。私たちの企画はサイエンス二〇一二という企画でした。私たちは、光の三原色・ドキドキ棒・釘のバランス・液晶シート・浮沈子など、色々な理科に関することを、来てくれたお客さんにも分かるように書いて写真を置いたりして、説明をしました。

そんな中、フリープロジェクトでは私は劇企画に入っていました。私は本番が終わった時に、「こんなにすばらしい企画に入れて、よかつ

たな。」と、思いました。

私は大道具の役なのですが、特別に中一・中三の先輩と舞台の前で踊らせてもらいました。最初は、はかしくてとても無理だと思っていたいました。しかし、だんだんオープンデーが近くなってくるにつれて、とてもはりきって練習できるようになって来ました。それは、劇に入っている先輩を見て、先輩のがんばって練習している姿を見ると、自分だけはずかしいなどと言つてられないという気持ちになってきました。私は、がんばって練習している先輩を見て、とても感動しました。そして本番になった時、もう、心臓が飛び出しそうになるかと思うくらい緊張しましたが、今まで練習してきた事をここで発揮しようと思って、がんばろうという気持ちになりました。

私は自分たちの企画と劇企画が両方とも成功できて、とてもうれしかったです。この次のオープンデーは今回よりも、もっとうまく行くようにがんばりたいと思います。

雨にも負けず風にも負けず

高三 山本 優子

高三として立教英国学院での最後のオープンデー。当日の二日前から参加した私達は、限られた時間の中で精一杯のおもてなしを計画した。各教室、テントのデコレーションからキッチンお手伝いのエプロンまで、九人分のエプロンを半日で作り上げることができたのは、クラスの団結力としか考えられない。

そして迎えた当日。起きた瞬間に聞こえた雨の音に私は嫌な予感を感じた。礼拝を終えても降り続く雨、テントでの販売を担当していた私は、室内への移動を覚悟していた。す

【2学期の行事】

9月8日	生徒帰寮	10月21日	生徒会主催 Guildford ショッピング
9月9日	始業礼拝	10月25日	川島成道バイオリンコンサート
9月10日	高等部実力テスト	10月26日～11月3日	オープンデー準備期間
9月20日	午後ブレイク	11月4日	オープンデー
9月23日	TOEIC・TOEIC Bridge の資格試験	11月11日	英語検定二次試験
9月23日～29日	毎日小学生新聞取材	11月17日	創立40周年記念コンサート
9月28日	Elmbridge 卓球チーム来校	11月28日～12月3日	期末考査
9月29日	ロンドン日本人学校文化祭訪問	12月6日	スクールコンサート
9月30日	第32回回数分解コンクール	12月7日	クリスマスコンサート、キャロリング
10月7日	ギター部コンサート		クリスマス礼拝
10月10日	アウトティング	12月8日	終業礼拝、生徒帰宅
10月13日～14日	英語検定一次試験	12月15～16日	高等部入学試験（A日程）実施



高1-1企画 アリス・イン・ワンダーランド



フリープロジェクト ダンス企画

立教英国学院に入学して初めてのオープンデ이는、恐ろしい速さで駆け抜けていった。あれだけの知恵と努力とこころを注いで準備したはずなのに、今になってみると、まるで徒競走をはたから見ているような気分だ。クラス企画の準備は大変だった。学級委員もオープンデイ経験者もほとんどが係・本部

We've not made it happen yet!

高1-1 畑田 夏実

あつという間に片付けてしまった静かな教室棟に一つだけ明かりががついている。また静かな戦いがはじまった。

すると、オープンデイ開始時刻の十時になった途端に雨が止み、虹が出た。これは、私達へのエールなのだと思え取り、外での販売チームは保護者の方々と共に外での販売を続行した。途中風にテントを壊され、骨組みの折れた部分を補強するなどしながら協力して、どうにか完売までたどり着いた。悪天候の中にも関わらず来て下さった、たくさんのお客様が喜んで帰っていかれるのを見て、達成感と喜びを感じた一日だった。とにかくめまぐるしく過ぎて行った三日間、下級生の頑張りを影でそっと見ながら、ほほえましく思ったり、もどかしく思ったり、自分達の頑張りをなつかしく思ったりしているうちに卒業が近くなってきたことを実感した。

立教のオープンデイ期間は、フリープロジェクトで優勝した劇企画のテーマにあったように、泣き笑いを共にする仲間との時間であると思う。高三は、直接の活動は少なくても、後輩を見てそのことを改めて実感させられ、またその立場になってこそ真に仲間の大切さを知るのだらうと思った。

員で、新入生が多いこのクラスでは、一人ひとりが自覚を持って作業するのは難しい。のんびりとした教室内の雰囲気、危機感を覚えたこともあった。胸の中に溜まっていたものを吐き出した止まらなくなつて、いつまでもあふれ続けた夜もあった。そんな中で得られたお客さまや先生からの誉め言葉や数々の賞。嬉しくないわけがない。閉会式後に友人が言った、「オープンデイは楽しんだもの勝ちなんだよ」という言葉が、印象に残った。

しかしどうしてだろう、徒競走を横から見るような、妙な余裕。全力疾走ではない、この感覚。

今回の準備で目立ったのは、計画性の無さと甘い管理体制。日々の計画、実行。反省点を次に活かす、効率化をはかる。物の管理、時間の管理、そして人の管理。なにもオープンデイに限ったことではない。当然のこと。そして、当然であつて重要なことだ。たくさん人の制約がある中でオープンデイだからこそ、それを実感した。

きつとこれらは、大人になつてもぶちあたる壁だと思ふ。単純で、難しい問題だ。わたしたちは、自分たちの能力で辿り着ける到達点に、達しなかった。全力でやりきった感がないのはそのせいだろう。自分たちの持てるパワーで、何かをやり遂げたか、と聞かれれば、「まだまだ!」と答えたくなる。こんなものじゃない、と言いたくなる。

来年は、二回目にして最後のオープンデイ。後戻りはできない。達成感の裏に苦く広がる、やり残したという思い。これをどう繋げて、どこまでスマートに動けるかが、来年の勝負どころだと思ふ。

わたしたちはまだ、何かを起こせていない。昔は、三分咲きくらいだ。

フラワーアレンジメント部

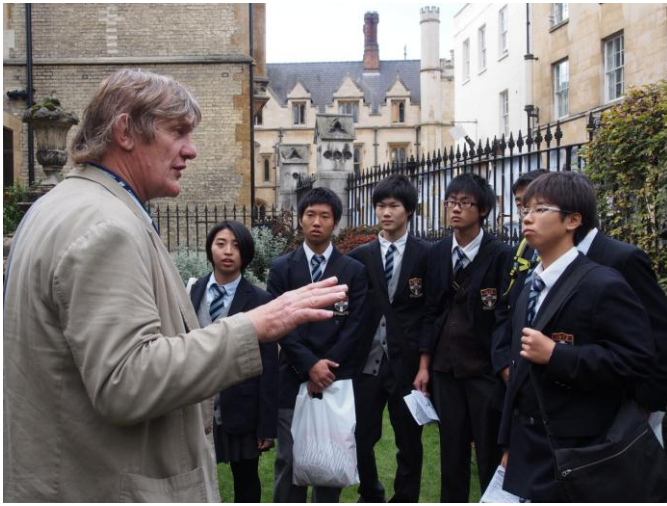
クリスマス用品の販売

フラワーアレンジメント部は、週一回、ダイニングやチャペルに飾る花のアレンジを行っています。今回のオープンデイでは、立教英国学院の創立40周年のお祝いの気持ちを込め、手作りのクリスマス用品の販売をさせて頂きました。目標はクリスマスリース60個、キャンドルアレンジ40個を完成させることでした。小さな造花や葉、シナモンやフルーツのモチーフを丁寧にリースの土台につけていく作業は思ったよりも大変なものでした。「週1回の活動日だけでは間に合わない!」と、10月は毎日のように放課後に作業を進め、全ての品が無事に完成しました。

そして迎えたオープンデイ当日は、沢山のお客様に足を運んでいただくことができました。本当にありがとうございました。部員たちにとって、自分たちの作った品で、「素敵ね!」と喜んでいただけたことが何よりの喜びです。

皆様に素敵なクリスマスが訪れますよう、
心よりお祈り申し上げます。





ケンブリッジの街を案内してもらった高1の生徒



ハリー・ポッターの映画に出てくるナイトバス

興味心

高一―二 岡田 元希

アウテイングに行く前、僕はケンブリッジについて何も知らなかった。せいぜい知っていることといえば世界の一位、二位を争う名門大学であるということぐらいだった。でもケンブリッジを知るにつれて、一つの興味深いことを知った。それは「進化論」や「種の起源」で有名なダーウインがケンブリッジ大学出身だということ、そして彼のコレクションが飾られている博物館があるということである。僕は半ば強引に班員を引き連れてセジウィック地球科学博物館へと足を運んだ。

博物館で僕らを最初に迎えてくれたのは巨大なイグアノドンの化石だった。いきなりこんなものを見せられてはたまらない。僕の興味心はうずき、胸は期待で膨らむばかりだった。中へ入っていくと、肉食恐竜や象、鹿の頭部の化石やアンモナイトや草木の化石などとても豊富な種類の化石があった。首長竜の化石は形が復元されていて、これが海を泳いでいたと思うとゾクゾクした。中でも、クモの化石には驚いた。五十センチメートルもの巨大な化石だったのである。立教の森にもひょっこり出てきそうな迫力だった。この他にも沢山の貴重な展示物をこの目でしっかりと見ることができた。まるで古代にタイムスリップしたような、そんな感覚を味わえた。

今回見た化石の中にダーウインのコレクションはあった。きつと僕がこの博物館で最初に感じた興味心と同じような気持ちから、彼は研究をスタートしたのではないかと思う。それはダーウインだけでなく、ケンブリッジや世界の科学者たちも同じであろう。この少しの興味心を忘れずにこ



イギリスを旅する

アウテイング

小中学部はハリーポッターの世界を存分に楽しめるワーナー・ブラザーズ・スタジオツアー・メイキング・オブ・ハリーポッターへ、高1はイギリスが誇る学都ケンブリッジ、高2は大学の街オックスフォード、高3は最後のアウテイングとしてロンドンへ行きました。

これから過ごしていきたい。そんなことを思った、ケンブリッジのアウテイングだった。

アウテイング

中三 松田 祐理子

アウテイングで行く場所を先生から聞いた時の歓声と、実際に行って見た時の感動が忘れられない。私達中三と中三以下一同はワーナー・ブラザーズ・メイキング・オブ・ハリーポッターに行った。ここにはハリー・ポッターの映画を撮影した時に使われたセットや衣装などが展示してある。新聞でその記事を読み、いつか行ってみた

男子バスケットボール部 リーグ戦を通して現地校との交流

男子バスケットボール部は今年から地元のリーグ戦に参加することになりました。参加校はランシングカレッジ、マイケルホール、セント・ビーツ、ワース、アーディングレイの5つの現地校と本校を合わせた全6校。

立教周辺の学校が試合の機会を増やすために集まったのがこのリーグ戦の始まり。1校につきHOMEとAWAYの2試合を行い、10月～2月までの期間に計10回もの試合を行うことになりました。

めったにないこのチャンス。現地校の学生を相手に戦えるということだけではなく、共に食事をする機会もあり、交流を広げる場となりつつあります。

【今学期の試合結果】

Lancing 70-53 Rikkyo / Worth 28-35 Rikkyo / Ardingly 59-50 Rikkyo / Michael Hall 57-74 Rikkyo





ロンドン・アイの中で

いと思っていた矢先、アウティングで行くことになり、行く前日は嬉しすぎて他の事が考えられなかった程である。アウティング当日、朝、バスに乗り込み、十時過ぎにはスタジオに到着。スタジオの前でその雰囲気を感じ、中に入ってハリー・ポッターの世界に再び感動した。でも、その感動はまだ序の口。スタジオ・ツアーで通されたシネマ。その先には展示室。展示には衣装、セット、小道具、何から何まですべてハリー・ポッター。その世界にどっぷり漬かって見ることが出来る。校長、ダンブルドアの部屋、学校の絵画、とにかく全てがハリー・ポッターの為にだけにスタッフによって、一枚一枚描かれ、造られ、そこにあった。私はハリー・ポッターの世界が本当にある様に思えてならなかった。この映画に携わった一人一人が全身全霊をかけて造り上げている物一つ一つが力強く、繊細で美しく、映画の為に造られた物として、

どうしても見られないのである。映画の世界の裏には、綿密な設計と、技術があることも知った。 Hogwーツ魔法学校の内装図、外装図、そして模型。全てが精密で、出てくるのは感嘆の声だけだった。

現実の世界に引き戻されるはずのシチュエーションでも、感動は絶えなかった。魔法の杖、制服、箒。見て回るだけで楽しかった。いるだけでわくわくして、幸せだった。もつといたい。そう思える楽しさがあった。

今回、ワナー・ブラザーズに行つて、私は初めて映画を、「世界」として見た。その世界を創るには、スタッフ一人一人の

パッションと、団結力が必要なこと、そしてそこに、スタッフのやりがいを見出しているんだ、と感じた。ハリー・ポッターという世界に魅せられたからこそ、ワナー・ブラザーズはハリー・ポッターを映画にし、私達に見せてくれた。それに魅せられた私達は、ハリー・ポッターという世界に魔法をかけられた、といえるかもしれない。その魔法は気付かない内に消えてしまふ。この魔法、感動をずっととっておきたい、そして、分かち合いたい、そう思う。

それでも大好きな「霧の町」ロンドン

高三 飛野 剛紀

霧の町ロンドン。どこか幻想的な雰囲気漂わすフレイズではあるものの、五年間何度も行ってしまふと現実の世界を受け止めざるをえない。イギリスの経済、政治

の中心地であり、繁華街が集中するロンドンでは、十八世紀半ば頃、つまり産業革命を起源に工業が発達するにつれて世界の貿易、金融の中心地として繁栄してきた。霧の町と言われるものの、要するにその霧は、霧でもミスト、もやのように自然に発生した美しいものではなく、空気をむしき、観光客、住民に害を与えるスモッグにちかい霧が充満しているのである。

スモッグの町ロンドンとはいえ、繁華街である事は、事実に変わりない。国会議事堂、ビッグベンを案内してくれたガイドのおじさんは、国の最高機関を案内することもあり正統で勤勉な趣を持ちながらも、気さくでユーモアのある表情を浮かべていた。ロンドンアイからのロンドン市内の眺望は、お洒落な町並みと陽気な雰囲気を感じさせてくれて、その裏側にある黒い影など想像すらできない。

夜のロンドンは、盛り上がる。日中は英国紳士であったに違いない白髪のおじさんが、りんごのように真っ赤になった顔でバブから出てくる。市内のそこら中で大きな看板をはっているシアターには、開演を待ちきれずに大勢の人が興奮した様子で集まってくる。ロンドンのミュージカルは、国民にも観光客にも愛される超一流舞台芸術だ。

実は僕は、ロンドンが大好きだ。いくら汚い空気であろうとも、裏道に恐ろしい影が潜んでいるようにも、国際化の進んだ、世界中の人々の笑顔と出会える、明るく陽気なおしゃれな町。そんな大好きな町に大好きなメンバーで訪れることが出来た。最高の思い出を本当にありがとう。感謝の気持ちでいっぱいです。



ハリー・ポッターの撮影で使用された展示品



高2 オックスフォードにて



10月25日、イギリスと日本を拠点にソリストとして精力的に活動を展開するバイオリニスト、川島成道氏を本校にお迎えしてコンサートとワークショップが開かれました。艶やかで限りなく透き通った魅力的なバイオリンの調べは、この夜ここに集まった人たちを不思議な魔力で魅了してくれました。

川島成道さんのコンサートを通して

高三 島垣 拓海

先日、川島成道さんというバイオリニストのコンサートがあった。彼は幼少時より視力障害を患い、目がほとんど見えなくなってしまう。その時、私達の想像を絶する苦しみと演奏から、彼自身からも苦しみや悲しみといったものは伝わってこなかった。それどころか彼からは、自信とバイオリンへの真剣さが伝わってきた。いったい何が彼を立ち直らせ、何が彼をこれまで導いてきたのだろうか。それは夢見ることだと私は思う。

『Let Freedom Ring. 自由は鳴り響け』という演説を知っているだろうか。これはマーティン・ルーサー・キングという牧師が、彼の携わっていた黒人公民権運動で行った演説だ。着目してもらいたいのは自由ではない。演説の始めの一説を紹介したい。『I say to you today, my friends, so even though we face the difficulties of today and tomorrow, I still have a dream. 今日同志に言おう。私たちは今日、そして明日の困難に直面しているが、私にはまだ夢がある。』そして彼は『I have a dream. 私は夢見るのです。』と言い、その後に彼の夢を言い、これを何回も繰り返した。この演説が黒人公民権運動に同調した人々を立ち上げさせたのは『I have a dream』という言葉だと思ふ。彼らも異なるものでも、夢見たからではないだろうか。川島成道さんも夢見たからこそ視力障害に屈することなく、今日のような素晴らしいバイオリニストになったのではないだろうか。

私たちはどんな状況だろうと常に今日、明日に夢見なくては行けない。どんな小さい夢でもあるからこそ、先に進めるのではないだろうか。私も最後にマーティン・ルーサー・キング牧師みたいに夢を書きたいと思う。

「I have a dream that I have a dream at all the time.」

川島成道 バイオリンコンサート



立教歳時記

乗馬の寄り道 ～色づく丘陵～



11月中旬、風と雨の嵐が何度かやってきた。
一晩ごとに木々は葉を落とし、あつというまに裸になった。丘と野が茶色にかわっていった。

雨が降り続くと、「ああ、冬がやってきたな」と思うのがイギリス。
おそろしい風が一晩中荒れ狂い、歴史ある本館（女子寮）はガタガタと音を立てる。季節はあつというまに冬の顔へと変貌していく。

そんなイギリスで、10月から11月のあいだ、つかの間の秋が目を楽しませてくれる。

すでに8月から涼しくはなっているのだが、いかにも秋だな、と感じられる風景になるのは10～11月。10月下旬、校内の桜の木が一斉にオレンジ色に色づきはじめる。そしていつもオープンデイまでもたないのだ。
桜がオレンジ色の葉を散らす頃、イギリスの丘や野原の木々はいつせいに山吹色に染まり始める。

「イギリス南部の秋は黄色だなあ」

紅よりも、褐色・黄色の木々が多いような気がする。乗馬場へ向かう道は圧巻。



GODALMING（ゴダルミン）へ至る道は切り通しのような、丘を狭く切り開いた細長い道。道沿いの木々が大きくすくくと立って、ひまわり色の葉をはらはらと散らすのだ。

はやくもかたむき加減の秋の日射しが、葉に透けて、黄色がますますおひさまの色に輝いていく。

「来週も見られるかなあ」

そうだね。嵐が紅葉（赤くないけれど！）を吹き散らしてしまわないといいね。...と語った11月の9日。

次の週は昼をすぎても晴れない霧につつまれて、紅葉も真っ白。幻想的。
23日の最後の乗馬のときは、丘陵はもう、茶色にかわっていた。

刈取りの終わったトウモロコシ畑で、馬を走らせて canter を楽しんだよ。

英語科プロジェクト

ここ数年本校では「生きた英語」の習得を目指して様々な取り組みを始めています。イギリス人教員による EC(English Communication)の授業では、地域社会との交流を積極的に進め、さらに今学期からは「ドラマ」の授業を本格的に導入することになりました。以下、EC Head の Mrs. Sharp によるレポートです。



Drama workshops

The EC department has been busy this term with students taking part in various activities. We started in September with a day of drama workshops held by Laura Sydonie, an instructor from the Big Foot Theatre group. Not only is Laura an accomplished actor who has performed around the world, but she is also the director of her own children's theatre company, so our students were in good hands. Using a mixture of mime and drama games her objective was to encourage speaking and confidence within the students who, although apprehensive at first, soon relaxed and greatly enjoyed the sessions. As a result of the workshops, Drama has now been included in the English curriculum with the aim of equipping our students to be confident English speakers.



Table tennis club

We have also played host to the Elmbridge Village table tennis club who, with an average player age of 80, challenged our students to a tournament. Thinking they would 'go easy' on the Elmbridge folk, our students were taken by surprise as, after a very competitive afternoon of doubles and singles matches, Elmbridge were declared the winners; a very good example of the English idiom, 'Never judge a book by the cover'. We are already in talks regarding a re-match.

Recycling

Recycling has been the topic of study for the H2 project class. The students have learned the fundamentals of recycling, and why it is important to reuse when possible rather than adding to landfill sites. As part of the project the students have learned how to weave a handbag from strips of old plastic and, with this new-found skill, they ran a workshop in English for volunteers from Elmbridge Retirement Village. The ladies and gentlemen from Elmbridge thoroughly enjoyed the experience, and each left with a bag made from recycled materials.

Interview

Also, as part of their recycling studies, our students have interviewed Rebecca-Jane Eaton, a local ethical fashion designer who has a shop and workshop facilities not far from Rikkyo. Rebecca is a successful handbag and accessories creator who has spent time working alongside the head designer at Givenchy in Paris; yet again, our students were fortunate enough to have access to someone with considerable experience and expertise. Not only did they interview Rebecca, but they also attended one of her workshops where they made their own accessory from recycled leather jackets and vintage fabric.

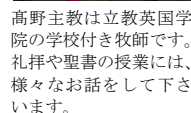
The EC department has enjoyed the autumn term and is dedicated to providing each of the students with a positive and enjoyable experience of English. We are already planning ahead for next year in order to support our curriculum with appropriate educational and cultural events.

毎日小学生新聞に掲載される！

10月23日付の毎日小学生新聞に、本校の特集記事が掲載されました。

ロンドンオリンピックでイギリスが注目された今年、毎日小学生新聞の記者の方が本校を訪れ1週間に渡って取材、3ページに及ぶ特集記事が掲載されました。新しく導入されたイギリス人教員による「ドラマ」の授業を中心に、本校の英語教育への取り組みから寮生活まで、本校の様子が詳しく紹介されました。





高野

ここにはイギリスで最初の大学が現在も存続し、中世の音楽の研究でも知られています。当時の音楽を研究し、楽器を復元し演奏もするのです。私は数年前この町へ行って、この町の人々が演奏する中世の音楽のCDを数枚買ってきて聴き、驚きを覚えました。学生の頃世界史で学んだ中世というと、暗黒時代という印象を持っていたのです。ところがこのCDで聞く限り、中世の庶民の音楽はとても優しく温かいのです。中世の庶民の生活はこんなにも底抜けに明るく楽しかったのかと思いました。これに目が開いて気付いたことは、常に先入観に囚われず絶えず学び目を開くことの大切さです。この中世の音楽のCDは立教の一学期の授業で生徒にも聞いてもらいました。

そして夏休みも終わりこの学期の最初の礼拝では、何時も頭から離れない東日本大震災後に良く用いられる「絆」

この女の人は大震災以前には、立派な家に住み美味しいご馳走も食べ親しい人とも話す普通の生活を当然としていたのでしょう。ところが震災や津波で全てが失われました。そして今は仮設住宅に住み、少しのご飯をおかずも殆ど無いまま食べ知人ともあまり会えない生活です。普通に考えれば震災前の方が当然幸せな生活でしょう。しかし、彼女には震災前の当たり前と考えていた生活よりも、現在は実際の生活

が不便であつても沢山の人々の支援や助けで生活出来るという、感謝を心にく深く刻んだのでしょうか。他の人々への感謝の心に自らが気付いた時、今の方が幸せかも知れないという言葉が思わず口から出たのでしょうか。もちろん復興が一日でも早く実現することが望ましいのは当然ですが、見えなかったものが新たな気付きとして見えるようになったことこそ大切であると思えるのです。

「絆」とは人と人との結び付きです。新約聖書で「愛」という言葉は、ギリ

また聖書の「時」という言葉も「クロノス(普通の時間)」と「カイロス(生き感じる時間)」とが使い分けられています。「クロノス」は時計が刻む時間ですが、「カイロス」は人が生きて感じる時間です。人はつまらない退屈な時は長いと感じ、充実した楽しい時は短く感じる、同じ時間でも長い短く感じる時を示しています。

この立教の生活は二四時間、寮や食事また勉強を共に生活しています。キリスト教を通してこのアガペとカイロスを心として絆と充実した時を生活し新しい学びに目を開いて行くことを願っています。こうした二学期を今送っています。



試験会場：立教大学

期間：2013年7月7日(日)～7月12日(金)

メールマガジンご希望の方はホームページの (www.rikkyo.co.uk)「メールマガジン配信登録」から登録ができます。
立教英国学院通信を電子配信に切り替えたい方は、infodept@rikkyo.w-sussex.sch.uk までご連絡下さい。